

体験談・官能小説 R-18

——その夜、板がざわめいた——

全部言い当てる女 頭の中を実況 する遥香

実話投稿板より

TOR-NET

R-18

©2026 TOR-NET

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

梅雨のじめじめした残業続きで、銀行の休憩室に俺と遥香しかいなかった日だ。時計はもう19時半を回ってて、外はまだ雨がしとしと降ってた。俺は拓也、30の独身で、このスレに自分の恥を書き込んでる張本人だ。遥香は同じ職場の31歳、黒いブラウスにタイトスカートって普段の恰好のまま、コーヒーカップをテーブルに置いた手で顎を支えて、じっと俺の顔を見てた。

「拓也くん、その目、さっきから私の胸元ばかり追ってるよね」

声は低めで、静かだけど、はっきり聞き取れる。俺は思わず息を止めた。遥香は笑ってない。ただ、ゆっくりと自分の黒い革ベルトの端を指で撫でながら、続けた。



「正直、脱がせたいって思ってるんでしょ？ ここで、って想像してる？ 私を押し倒して、って」

俺の視線が、反射的に彼女の胸元から逸れた。遥香のブラウスは上二つのボタンが外れてて、黒いブラの縁が少し見えてた。俺の指が無意識に自分のズボンの膝を搔きながら震えてるのを、彼女は逃さず見てた。息が少し荒くなってるのも、自分でわかった。

遥香は小さく息を吐いて、指をベルトのバックルに這わせた。

「はあ？ 違うの？ じゃあ、逆？ 私に命令されたい方？」

その言葉で、休憩室の空気が急に重くなった。エアコンの低い音と、雨の音だけが残る。俺は何か言い返そうとしたけど、喉が詰まって声が出なかった。ただ、唾を飲み込む音が自分でもはっきり聞こえた。遥香はまだ一步も近づいてこない。ただ、俺の視線と指の動きを、淡々と口に出してるだけだ。

俺はコーヒーカップを握り直した。指が少し汗ばんでて、持ちにくい。遥香の目が、その動きをじっと追ってるのがわかった。彼女はベルトの端を指で軽く弾く、小さな音を立てながら、俺の顔をまっすぐに見つめ続けた。心臓の音がうるさくて、遥香に聞こえてるんじゃないかとまで思った。

002 名無しさん 休憩室で遥香が黒いブラウス緩めてベルト端弄りながら拓也に命令聞か聞かかって迫るの、なんか生々しい……よな

003 名無しさん >>1 ベルトの話ばっかで草 遥香のスカートの方はどうなんだよ

004 名無しさん >>2 銀行の休憩室でそんなやり取りしてたら確実に監視カメラに残ってるぞ。俺の前の職場でも残業明けに似たことや
って左遷された奴いた

005 名無しさん 遥香の指がバックル弾く音が... 19時半の雨音と混ざって... やばいw

006 名無しさん 梅雨の残業続きで銀行の休憩室って設定が出来すぎてる 釣り松確定

007 名無しさん >>3 仮に本当でも相手が31歳の同僚ならセクハラ防止規定に抵触する可能性高いからやめといた方がいい 労働局に
相談した方が無難

008 名無しさん 遥香のタイトスカート脱がせたいって拓也が本気で思ってるなら次はバックル外させろよ 応援してるわ

009 名無しさん 遥香がベルト弄りながら命令聞か聞かかって迫ってるの、なんかじわじわ来るわ

010 名無しさん >>3 スカートはまだ触れてないからこれからだろ。次は太ももとか触れさせろよ

011 投稿者 >>4 カメラは休憩室の隅にあったけど、角度的に死角だった気がする

012 名無しさん 19時半の銀行休憩室でそんな空気作られたら、さすがに仕事どころじゃなくなるだろ

013 名無しさん 遥香の指がバックル弾く音、雨音と混ざってリアルに想像できて草

014 名無しさん 31歳の同僚がそこまでストレートに言うか？ ちょっと盛ってる感ある

015 投稿者 >>7 盛ってない。ただの事実だよ

016 名無しさん 次は遥香に「バックル外せ」って言われたらどうすんだよ。OPの反応見たい

017 名無しさん タイトスカート脱がせたいなら、まずはベルト外させてからだろ。応援してる

実 況 台 本

……はあ。

拓也くん、その目……ただね。

さっきから、休憩室の隅で私を見て、指をテーブルに這わせてる。止まらない。指先が震えてるのもわかる。

……その指で、私のブラウスをはだけて、胸の谷間をなぞりたいって思ってるんでしょ。

今、頭の中で何回も想像してる。私の胸を両手で包んで、親指で乳首をこすってる自分を。

……正しい？

その目が、はっきりそう言ってる。

「遥香さんのブラウスを全部はだけて、乳首を舌で舐めたい」って。

「スカートをまくって、太ももを這わせて、もっと奥まで指を入れたい」って。

この黒いベルトのこと、さっきから気にしてるよね。

私の指がベルトを撫でるたびに、目が泳ぐ。

このベルトで、あなたの手首を固定されたらどうなるか……今、想像した？

想像したでしょ。

……黙ったまま、息を殺してる。

でも、指はまだテーブルを這ってる。止められないんだね。

その指で、私の胸を揉みしげたくて、でも一歩も動けない。

拓也くん。

今、私が言ったこと……全部当たってる？

当たってるよね。

その顔が、全部教えてくれてる。

……もっと、声に出してあげる？

あなたが今、どんなことを想像してるか、全部代わりに言ってあげようか。

>>6 休憩室の話の続きだけど、遥香が急に笑って「その指、動かしてるの気づいてる？」って言ってきたんだよ。19時半過ぎて、梅雨の雨が窓ガラスを叩く音がやたらデカくて、休憩室の照明も少し落としてるせいか影が濃い。俺はさっき視線のこと突っ込まれて動揺してて、無意識に右手の人差し指を軽く曲げたり伸ばしたりしてたみたいで。遥香は黒いブラウスを指でちょっと緩めながら、俺のその動きをじっと見ててさ、「拓也くんの指、今遥香の太ももをなぞってる妄想してるでしょ？スカートの上から、ゆっくり這わせてる感じ」って、俺の頭の中をそのまま声に出した。



指止めたら、遥香が「やめないで？ せっかくりアルに想像できてるのに」って、雨音がうるさいくらい響く中で平然と言う。息が少し熱っぽくて、ブラウスを緩めた襟元から鎖骨のあたりがチラ見えしてて、俺は慌てて指を握り込んだんだけど、「隠さないで。遥香が見てるんだから」って、軽く命令されて。声が低くて、笑ってるのに目が真っ直ぐで、逃げ場がない感じがした。

「もっと奥まで指を這わせてるつもり？ それとも、遥香が脚を組んで止めてるのを無理やり広げてる？」って、遥香が続けてくる。俺の指の動きを先読みしてるみたいで、ドンピシャすぎて声も出せなかった。雨の音と、遥香の指がブラウスの端を弾く小さな音が混ざって、頭の中でぐちゃぐちゃになる。スレの連中が言ってるベルトの話はまだ出てないけど、遥香の指が自分のブラウス端とか弄びながら、そんなこと平気で代弁してくるのが一番ヤバイ。指先が熱くなって、隠そうとしても遥香の視線がそれを許さない。もうただの同僚じゃなくなってるのが、はっきりわかった瞬間だった。

002 名無しさん 19時半過ぎに窓ガラスを雨が叩く音がデカくて照明も落としてる休憩室、俺も昔似た時間に指を無意識に動かして上司に睨まれたことあったわ

003 名無しさん >>1 窓ガラス叩く音がデカいのは梅雨の雨じゃ普通なのに、なぜか照明落として影濃くしてる点が不自然だろ

004 名無しさん >>4 指動かしてるの気づいてるって言われた時点で、もうただの同僚じゃねえよな

005 名無しさん 指の動き先読みされて19時半の雨音の中で命令されて… やばw 隠せねえ…

006 名無しさん 照明を落として影が濃い状態でそんなやり取りしてたら、仮に本人が同意してても後で「業務時間外の不適切行為」と指摘される可能性があるから注意した方がいい

007 名無しさん 雨音がデカくて照明落としてる中で指の動き先読みされるの、なんかもう完全に雰囲気作られてるよな

008 投稿者 >>24 雨の音で他の音が聞こえにくくなるから余計に声が近く感じるんだよ

009 名無しさん >>1 ブラウス緩めて鎖骨チラ見せながら命令してくる遥香、完全に主導権握ってるじゃん

010 投稿者 >>25 そう、笑ってるのに目が真っ直ぐで逃げられない

011 名無しさん 指を這わせてるつもり？って具体的に言われると、逆に動かせなくなるわ

012 投稿者 >>26 動かそうとしても視線で固定されててマジで動けなかった

実況台本

……指がまだ止まらないね。

テーブルを這ってるその動き、まるで私の胸を掴もうとしてるみたい。

拓也くん、今、私の胸の谷間を見て、指を這わせてる想像してるでしょ。

柔らかいところを、親指で押し込んで、形を変えるところを想像してる。

……やめないで、ってさっき私が言ったのに、

本当は君の方こそ、止められないんだね。

その指が、布越しに私の乳首をこすりたくて、でも動けない。

拓也くん。

もし私が足を広げたら……その指、どこまで這わせるつもり？

スカートの下まで、這わせて、

内ももを、ゆっくり撫で上げる想像……してる？

当たってるよね。

その目が、全部教えてくれてる。

息が、ちょっと乱れてる。

……もっと、奥まで想像してる？

私の足を、君の指で開かせて、

その先を、触れたいって思ってる。

でも、触れられない。

ただ、テーブルを這わせてるだけ。

拓也くん。

この目で私を見て、

どんなふうに触りたいか、

全部、声に出してあげようか？

それとも……このまま、黙って指を動かしてる方が、興奮する？

梅雨の残業で、誰もいない休憩室。

君の指だけが、止まらない。

……その指、震えてるよ。

>>26 ブラウス緩めて鎖骨チラ見せながら命令してくる遥香、完全に主導権握ってるじゃん

正直、あのコメント見て自分でも苦笑いしたわ。まさにその通りなんだよ。指の動きを全部代弁されてから、数分も経たないうちに空気がさらに変わった。

雨が強くなって、窓ガラスを叩く音が休憩室全体を包み込んで。照明はもうほとんど落ちてて、遥香の顔は影が濃くて目元だけがはっきり見える感じ。俺は指を握りしめたまま固まって、息を止めてる自分が情けなかった。

遥香が静かに笑って、「またその目だね」って言った瞬間、背筋がびくりって跳ねた。声は低くて、でも雨音に負けないくらいはっきり響いてる。彼女は自分の黒いブラウスをもう一段、襟元を緩めて、鎖骨のラインをわざと見せるようにした。左手は腰に回した黒い革ベルトの端を、親指でゆっくり撫でながら、じっと俺の顔を見つめてる。



「隠さないでって言ったのに、まだ隠そうとしてる。遥香の脚をなぞる妄想、続きやりたいんでしょ？」

指先がベルトのバックルに当たる、軽い金属の音が雨音の合間に聞こえた。俺は喉が乾いてて、飲み込む音が自分でも聞こえそうだった。遥香はそこで少し首を傾げて、

「座ったまま、その指で遥香の太ももをなぞる真似してみ？ 命令じゃなくて、ただやってみてって言うただだよ」

って、まるで日常の会話みたいに平然と言う。雨の音がうるさくて、他の人の気配が完全に消えてるから、彼女の声が異常に近く感じる。俺は指を動かそうとしたけど、視線が絡まって動かせなくて、結局また握りしめてしまった。

遥香はベルトを撫でる手を止めずに、笑ったまま続ける。

「はあ？ 動かないの？ それとも遥香が脚を組んで待ってるのを、指で無理やり広げてる妄想がしたいの？」

言葉がストレートすぎて、頭の中が真っ白になった。まだ何も触れられてないのに、太ももの内側が熱くなって、ズボンの中で反応してるのが自分でもわかって、恥ずかしさで顔が火照る。遥香はそれを見て、さらにベルトの端を指で弾くように鳴らして、

「動かして。遥香が見てるんだから」

って、静かに命じてきた。雨音のせいで周囲の音が遠のいてて、彼女の息遣いと声だけが妙に鮮明に耳に入ってくる。俺は指を少しだけ伸ばしたけど、すぐにまた止まって、遥香は満足げに目を細めてベルトを撫で続けながら、じっと待ってる。

この時点でもう、ただの同僚のやり取りじゃなくなってるって、頭の片隅でわかってた。

002 名無しさん >>25 雨音で声が近く感じるって部分 休憩室の照明角度と合っていない気がする

003 名無しさん 主導権完全に握られて…声近くて…動けねえ…

004 名無しさん 遥香が笑いながらベルト弾く音

005 名無しさん 次は脚広げ命令来そうで

006 名無しさん でも視線で固定され…

007 名無しさん 雨音で声だけ近くて照明は落ちてるって、なんか不自然じゃね？角度的に影の濃さ合ってるか？

008 名無しさん 遥香完全に上から目線でベルト弾きながら待ってるのエグいわ…動けねえってマジで草

009 投稿者 >>36 雨の音と照明の落ち具合は休憩室の窓側から来てる設定だよ。影は机の反射で濃くなってる

010 名無しさん 指伸ばしかけてまた握り直すの繰り返しがりアルすぎてヤバイ

011 名無しさん 次は「脚広げて」って命令来る流れ確定だろこれ

012 投稿者 >>39 まだそこまでは言われてないけど、雰囲気的にその先っぽいのは感じてる

013 名無しさん 遥香の声低めで雨負けないくらい響くの想像すると背筋凍るわ

実 況 台 本

……はあっ……んっ……

拓也くんの指、まだ私の中に……動いてる。

これで、もう本当に……決まっちゃったね。

私、拓也くんに、こんなところで……全部触られてる。

拓也くん、さっきから目が……熱い。

またその目だね。

このベルト、ずっと触ってる……よね。

私が見つめてるの、わかってる？

……あっ……！

もっと、奥……動かさないで……いや、動いてる……

んっ……はあ……っ

拓也くん。

私、もう抜けないよ。

この指、ずっと私の中に……残ってる。

拓也くんが、さっきからずっと見てたこと……全部、わかってた。

休憩室で、視線がブラウスの中まで……

指の動きで、どんなこと想像してるか……まで。

でも……止まらなかった。

私、拓也くんのその目を見て……

命令した。

「またその目だね」って。

あっ……あっ……！

奥まで……入ってる……

んっ……！ はあっ……

拓也くん。

私、もう……あなたのものだよ。

この感覚、忘れられない。

拓也くんが、さっきから察してたこと……

私も、気づいてた。

でも、止まらなかった。

止めたかったのに……止まらなかった。

これで……決定的だね。

もう、戻れない。

私、拓也くんに……全部、預けちゃった。

拓也くん……

私、もう、拓也くんの指示が……欲しい。

このまま……もっと、深く。

はあ……はあ……

決まっちゃった。

拓也くんが、私を……完全に……

んっ……！

……もう、抜けないよ。

この感覚……

拓也くんのもの。

ここまでが体験版です。続きは製品版で――

第2部では、音声実況の第1トラックをお楽しみいただけます。

サークル：TOR-NET